
GLASS WALL

リュナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GLASS WALL

【Nコード】

N1235Z

【作者名】

リュナ

【あらすじ】

一願いは力になるー
願いがカタチになった【超能力者】は世界中にいた。そして今、その超能力者が戦う【GLASS WALL】が流行していた。GLASS WALLが盛んな霧月学園中等部にアメリカからの転入生、あまいずみ れんり天泉蓮理がGLASS WALL部のマネージャーに!?

超能力者の転入生（1）

超能力者

自分の思いが自分の能力になる。世界中で超能力者は増加していた

「なあ、知ってるか？ 今日2年のところに転入生が来るらしいぜ」
「どこでそんな情報手に入れてんねん…」

「願いは力になる」

「マジですか！？ やったー！！ 錦戸先輩、昼休みに連れて来てくださーいね！！」

「おいおい、まだ女って決まったわけじゃねーだろ。つか、俺が連れてくんの？」

「願い。それは人それぞれである」

「秀ちゃんは女好きだしな。俺もだけど」

「こういうのは女ってのが定番っしょ。メツチャかわいい女の子っていう」

「つまり、力も人それぞれである」

「そのこはアレなんやろか」

「どーでもいいっすけど、おれは」

「もし女がそうだったら珍しいよなー！！」

「まだ女って決まってるやろー！！」

「超能力、自分の願いがカタチになる」



「…ここ?」

青髪の少女、天泉蓮理は転入先の学校「霧月学園中等部」の門前に来ていた。

季節は梅雨、この微妙な時期に転入というのは誰だって違和感を持つことだろう。

「無駄に広くないか…ここ」

広い。絶対に学校じゃないだろうと思ってしまいうぐらいの広さ+美しさだが、門にはしっかりと学校名が書かれていた。恥ずかしい。ここに入るのは異常に恥ずかしい。

「とりあえず職員室か…」

なれない校舎をキョロキョロしながら歩いていると、あちこちから視線を感じた。

私、どうか変なのかな…心配していると、廊下の角から現れた人にぶつかってしまった。

「わっ…!」

「お?」

蓮理はポテッと尻を突いてしまった。目を開けると立っていたのは茶色い髪の男だった。

「す、すみません! Are you OK?」

「（は？英語！？）ああ、ワリいな。お前こそ大丈夫か？派手に尻ついてたぞ」

「私は大丈夫です。…あの、職員室ってどこですか？」

「職員室はこっちだ。ついてきな」

さっさと歩いていってしまった男に蓮理ははっとして追いかけた。
意外と格好いい。

やっぱり第一印象って大事だね。背も結構高いし、人気者かな？
周りがキャーキャーいつてるし。

そんなことを考えていると、不意に話しかけられた。

「お前、見た事ねーけどもしかして転入生か？」

「はい。2年の天泉蓮理あまいずみれんりです」

「そっか、お。ここが職員室だ。あとは大丈夫か？」

なんだかんだで意外と近かった職員室！迷った私がバカみたいじゃ
ん！

心の中で叫んでみた。

「ぶつかったあげく道案内までThank youでした」

「いやいや。それじゃ、またな」

また…？不思議に思ったが転入そうそう遅刻もいやなのでとりあえず職員室に入った。

天泉蓮理の新たなスクールライフが始まっちゃいます…

超能力者の転入生（2）

「じゃ、紹介したら中に入ってきてくれ」

「はい」

なんだかんだで無事に担任の先生に出会えました。現在進行形で2
12の教室前です。

先生が中に入るとざわざわしだしていた。うわー期待しないで…



「みんなよく聞け、今日このクラスに転入生が来るぞ」

「せんせー男の子ですか？」

転入生に興味深々のクラスのみんな。女はわくわく、男もわくわく

「女には残念だが転入生は女だ。男は期待していいぞ！」

「「おっしゃー！！」」



「「おっしゃー！！」」

な…なんでそんなに盛り上がってんの！？担任何言った！！

ドアの前でドキドキな私にそんなプレッシャーを与えないで！！た
いした女じゃないんだから！！

「さ、はいってくれ」

一度深く深呼吸して、ゆっくりドアを開けた。教卓の前まで歩き、みんなのほうを向くと誰もが蓮理を凝視していた。
第一印象は朝の人みたいにさわやかに！

「えっと、天泉蓮理です。び、微妙な時期の転入ですが怪しくありません。よろしくお願いします」

ペコッと頭を下げてあげると教室がしゅんとしていた。
やばっ、私ミスった！？

「席は…錦戸の隣が空いてるな。そこに座ってくれ」

「錦戸…？」

「ああ、すまん。錦戸、手を上げろ」

あがった手の持ち主はなんとさっきであつた爽やか男の子。そして席は窓側というラッキーな席。
自分の席まで行くとイスまで引いてくれた。

「ありがと…」

「いやいや。また会ったな」

「あ、そういえば名前聞いてなかったから…」

「そういえば…俺は錦戸白夜。よろしくな」

朝のホームルームが終わると、男女構わず蓮理の席によってきた。
あれ？私自己紹介失敗してなかった！！

「ねえ、天泉さんはどっからきたの！？」

「髪の毛きれーだね!!」

定番の質問攻め。でも少ししたらすぐ飽きるのにね。

「私…ア「ちょっと、天泉さん!!」はい？」

正面には何だか偉そうな女が3人立っていた。早速目をつけられそう…かも

超能力者の転入生（3）

「天泉さん！」

「はい？」

コイツラは偉いんだろうか…さっきまで周りにいた人たちは怯えて私の後ろにいるし…

「知ってる？ここは学業・超能力のトップ校なのよ？あなたには何が出来るのかしら？」

「まさか、なにも出来ないなんていわないわよね？」

「まっさかねー！」

むかつく奴等だな。まったく…

すると、隣に座っていた錦戸が話しかけてきた

「おい、天泉。何でもいいから言つといたほうがいいぞ！」

「錦戸くん、おはようございます！！」

「ああ…」

ああ、なるほどね。人気者に話しかけると目をつけられるって話か。

「さあ！はやく言いなさいよ！！」

「まず、女が超能力者なんてことはないわよね。だってあれは超能力者のなかでもたった0・001パーセントの確立ですもん」

「え？ここには女の超能力者はいないんですか？」

その言葉に3人＋錦戸が笑い出した。

「え？何か変な事言った??」

「あっはっは!! やっぱおもしれーやお前」

「あなたもしかしておバカ!? もう一度言うけど女の超能力者がうまれる確立はたった0.001パーセント。ここには男の超能力者しかないわ」

「それともなに? あなたは自分が超能力者だ、とでも言いたいのかしら?」

「…私、超能力者ですけど」

一瞬、みんなが固まった気がした

「うそおっしゃい!!」

「うそじゃないよ!!」

「じゃあ証拠を見せなさいよ!!」

「いいよ!! 見せてあげる!!」

蓮理はイスから立ち上がると、左手を前にかざした。

「我が手に集いし光よ、汝の最速をもってこれを解き放て」

蓮理の左手に眩い光が集まりだした。それは雷のごとくバチバチと音を立てながら大きくなっていった。風を巻き上げ、机やイスが動き出す。

「あ…や、やめて!!」

「やんないよ」

蓮理は集めた光をあっさり消した。3人の女は叫びながら走って教室を出て行ってしまった。

「あれ…やりすぎた？のかな？」

すると、また蓮理の周りに人が集まってきた。やけに盛り上がっている…why？

「天泉さん！超能力者だったの！？」とか「すごいや！親衛隊をあんなにあっさりと！！」とか隣の錦戸も驚いていた。

「おまえ…すげえな」

「え？」

すると、授業の始まりのチャイムがなり、そろそろと自分の席に戻っていった

蓮理はあ、と思い、錦戸に話しかけた

「あのさ、悪いんだけど教科書貸してくれない？」

「あ、ああ」

コイツ…ただものじゃねえ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235z/>

GLASS WALL

2011年12月7日00時49分発行